

# ちょうどいい田舎たきかわ



ま え だ こう き ち  
た き かわ  
滝川市長(北海道) 前田康吉

## 滝川の歴史と私のルーツ

私共が住む滝川市は北海道のほぼ中央に位置し、道都札幌市と第2の都市旭川市の中間にあります。行政面積は115・90km<sup>2</sup>と北海道では小ぶりのまちです。本年は開村131年となり、人口は約3万9000人、基幹産業は農業とサービス業を中心とした3次産業で「ちょうどいい田舎」であります。

ご存じのように、北海道は開拓の歴史であり、本市は屯田兵制度により、北の防人として九州から入植された方々により開かれました。わが前田家の歴史も開拓の歴史であり、曾祖父が隣町に入植したのが始ま



石狩川と空知川の合流地点に位置する本市

りであります。

明治維新の後、廃藩置県により侯爵となった蜂須賀侯が隣町の雨竜という所に農場をお造りになるということで、仕えていた曾祖父をはじめ、多くの農民が四国の徳島市よりこの地に渡ってまいりました。鬱蒼とした原始林も、血がにじむような努力により美田が広がる地となりました。祖父も札幌農学校を卒業後、侯爵から農場長を命じられ、その後、大正8年に雨竜農場で取れた米をみそやしょうゆに2次加工する会社を本市に興し、社長となりました。その会社を父・私と受け継ぎ、市長となつて社長は降りましたが、約100年続く会社でありました。



丘陵地に広がる菜の花の黄色い絨毯

本市の歴史にはいくつかの節目がありました。一つ目は、函館本線から根室本線への鉄道の分岐点をどこにするかという時に、祖父たちは侯爵のお力をお借りして当時の貴族院に陳情をし、大正2年に滝川と道東を結ぶ上富良野線(現根室本線)の開通により交通の要衝となりました。二つ目は、戦後「北海道人造石油株式会社」という東洋一の国策会社の破綻により市が赤字再建団体となった時にも、祖父たちは国会議員の先生方のお力をお借りし、工場跡地に陸上自衛隊の駐屯地を誘致し脱却しました。祖父の「まちは政治で変わる」という言葉は今も耳に残っています。

## まちへの想い

明治の近代国家が造られる中、北海道の発展はさまざまな形がありました。石炭政策は国家の形成に必要な資源であり、本市の周辺に多くの炭鉱を中心としたまちができました。そして、東北などからによる農民の開拓で豊かな農地も広がり、まちが形成されました。

本市は、大川である石狩川の舟運から始まり、明治維新の中で囚人となった人々が切り開いた道路による陸上輸送の中継点、そして鉄道の分岐点、交通の要衝として周囲の産炭地域、農村地域の5市5町の中心都市として発展してきました。しかし石炭政策が変わり産炭地が衰退する中、わ



広大な北海道の空のもとで、グライダーに搭乗する筆者

しかし私が浪人の憂き目にあっていた頃、合併は頓挫しました。合併を実行するとこんな問題が起きるとい議論だけが交わされ、合併をしなければこんな未来になってしまうという想像力が欠けていたと思っています。平成23年に市長に就任してからは合併の話など一切考えず、広域行政の連携によるこの地域の生き残りを考えています。今年で政治の道に進んで30年、祖父はどのように見てくれ

がまちにも大きな影響が出てまいりました。大学を卒業してから家業を継いだ私の目には寂れていくまちが映っていました。「生まれ育ててくれたこのまちに何か起こしたい」との思いで、当時JC運動に参加していた仲間の後押しもあり、36歳の時に市議会議員となり、1期務めた後に北海道議会議員になりました。ちょうどこの頃は平成の大合併の始まりの時でもあり、人口が加速度的に減少するこの地域において、ぜひとも合併すべきであると考えていました。行政コスト削減による財政の健全化、機能分担によるフルセットのまちづくりからの脱却などが地域の生き残り策だと

思っていました。

ているのでしょうか。そして平成の大合併の総括は誰がするのでしょうか。

### まちの誇り、私の誇り

おのおのの自治体にはまち自慢の物があり、シチズンプライドになっているものもあるうかと思えます。本市にも青い空を飛び交うグライダー、黄色い菜の花が咲き誇る丘陵地、おいしい味付けジンギスカンなどがあります。私が誇りに思う「そらぶちキッズキャンプ」というアジアで唯一の施設があります。

この施設は、全国に20万人いるといわれる難病の子どものための「一度でいいから外で遊んでみたい」という夢をかなえる医療付きキャンプ施設です。映画好きの私が大好きな俳優、故ポール・ニューマン氏が提唱してアメリカで始まったもので、世界中の16カ所に認定されたキャンプ施設があり、「そらぶちキッズキャンプ」はアジアで最初の公認キャンプ場なのであります。私の高校の先輩であった松本守さんが、国土交通省公園緑地課長時代から提唱し、聖路加国際病院の細谷先生をはじめとする本当に多くの人々の想いが結集して、10年前に実現したものであります。市としては土地を提供しただけで、建設費用、ランニングコストなどは全て寄付で賄われているという日本では珍しい運営です。今まで多くの子どもたちがキャンプに参加しましたが、



そらぶちキッズキャンプで車いすから降り、乗馬にチャレンジする利用者

近くの空港から本市に来てその空港に帰るまでの費用をキャンプ側が負担をし、同行のお医者さんや、看護師さん、そしてスタッフは皆ボランティアです。私も何度か子どもたちの様子を見に行きましたが、普段、病院や自宅の窓からしか外の世界に触れられない子どもさんが、乗馬をしたり家族と大きな声で笑い夢をかなえている姿を見て、いつも大感動であります。

このような素晴らしい施設はこのまちの誇りであり、「人に優しいまち、人が優しいまち」がつくられていると思います。私はこれからも先人の想いを大切にし、コロナ禍においてもひたむきに明るいまちづくりを進めて行きたいと思えます。